

対比のハの否定極性について[†]井戸 美里[‡]

(国立国語研究所 プロジェクト PD フェロー)

1. はじめに

⇒ 対比のハは、否定文／肯定文を選ばず現れる。

➤ 対比のハにとって、否定辞はオプションなもののように見える。

(1) 花子ハ 第1志望の大学に 合格{した／しなかった}。

(でも、太郎は第1志望の大学に合格{しなかった／した}。)

⇒ 本当にそうだろうか？

➤ 肯定述部も否定述部も、同様に対比のハと共に起るのであれば、累加のもののように、スコープのインタラクションが起きてもいいはず(沼田 2000、小林 2009 他)。

➤ ところが実際は、対比のハは否定とのスコープのインタラクションを起こさない。

↳ 対比のハは、従属節中では否定極性表現シカと同様に振る舞う。

(2) [第2希望の大学にハ 落ちないように]、気を付けた。 (曖昧性なし)

(3) [第2希望の大学にモ 落ちないように]、気を付けた。 (曖昧性あり)

(4) [やる気のある人シカ 出席しない]ように、課題を多く出した。 (曖昧性なし)

(5) 本発表の目的

a. 肯定文に現れる対比のハと否定文に現れる対比のハのふるまいの違いを指摘する。

b. 否定文に現れた対比のハは、否定極性表現シカと同様にふるまうことを指摘する。

(6) 本発表の主張

a. 従来「対比のハ」と呼ばれてきたもののなかには、否定極性を仮定すべきものがある。

b. 肯定文に現れた対比のハは、(6a)の対比のハとは意味が異なる。もしくは、主節でのみ例外的に現れている例である。

2. 先行研究

2.1. 対比のハの否定極性に関する指摘 (小林 2009、Sawada 2013)

⇒ 小林(2009)：対比のハは否定極性表現であり、累加のモは肯定極性表現である。

➤ ただし、小林(2009)における極性は、「{否定述部／肯定述部}と呼応する」という意味ではなく、「{ハ／モ}が持つ素性の一致を{肯定述部／否定述部}が阻害する」という消極的な意味での極性である。

[†] 本発表は、JSPS 科研費 (課題番号 17H07069) の助成を受けたものである。[‡] i.misato59@gmail.com

- (7) a.?? 花子は [vp 箸で ケーキは 食べ] た。
 b. 花子は ケーキは 箸で 食べた。 (小林 2009: 124)
- (8) 花子は [Pop[vp 箸で ケーキは 食べ] なかつ] た。 (小林 2009: 124)

- これらの制約は主節でのみ起こるものである。「小さい」従属節内では、とりたて詞の素性一致が働かないため、移動は義務ではなくなり、否定辞とハ・モの関係もスコープのインタラクションを起こす。
- ↳ モについての従属節データは挙げられているが、ハについての従属節データは未検証。
 - ↳ (2)(3)から分かるように、従属節でのハの振る舞いは、モの振る舞いとは異なっているため、経験的な問題がある。

⇒ Sawada(2013):ハには、とりたてる要素との意味的關係によって、肯定極性表現になる場合と、否定極性表現になる場合がある。

- ハは意味的に、述語に対して実現可能性が高い要素をとりたてた場合は肯定極性表現になり、低い要素をとりたてた場合は否定極性表現になる。

- (9) 太郎は {素人にハ/??プロにハ} 勝った。 (Sawada2013: 377)
- (10) 太郎は {??素人にハ/プロにハ} 勝たなかった。 (Sawada2013: 378)

- ↳ スケールを持たないような単純な対比の場合の極性については積極的に議論されていない。
- ↳ 主節と従属節の違いについては言及がない。

3. 「対比のハ+肯定」と「対比のハ+否定」の違い

3.1. スコープのインタラクションの有無

⇒ 「対比のハ+肯定」も「対比のハ+否定」も自由に許されるのであれば、「ハ>否定」「否定>ハ」のどちらの解釈も許されて良いはずである。

- しかし、実際には、「ハ>否定」の解釈は存在しない。

(11) [滑り止めの大学にハ 落ちないように]、気を付けた。
 (再掲、ok ハ>否定、*否定>ハ)

(12) [滑り止めの大学にモ 落ちないように]、気を付けた。
 (再掲、ok モ>否定、ok 否定>モ)

(13) 太郎は、[花子が 太郎のおやつハ 食べないように] 見張っていた。

a. ハ>否定：太郎は、花子が花子のおやつを食べて、太郎のおやつを食べないように見張っていた。

b.*否定>ハ：太郎は、花子が花子のおやつは食べずに、太郎のおやつを食べるということはないように、見張っていた。

- ↳ 「対比のハ+否定」と「対比のハ+肯定」は均質なものではない。
- ↳ 否定とのスコープ関係が常に一定に保たれるのは、シカのような否定極性表現と同じふるまいである (→(4))。

3.2. 現れる節サイズの違い

⇒ 主題のハは従属節に埋め込めないが、対比のハはある種の従属節に埋め込むことが可能(奥津 1974、沼田 1986)

(14)* [鳥は飛ぶ]時 (奥津 1974: 20)

(15) [色は美しいが香はよくない]花 (奥津 1974: 20)

⇒ 「対比のハ+否定」は、主節・従属節を選ばず現れる。

⇒ 「対比のハ+肯定」は「小さい」従属節(B 類従属節; 南 1974)に埋め込むと解釈が困難になる。ただし、主節かそれに準ずる「大きい」従属節(C 類従属節)には現れる。

【C 類従属節、主節】

(16) a. 我が社には今年、(新卒は入社しなかったが、) 中途ハ入社した。それなのに、即戦力は増えなかった。

b. 我が社には今年、(中途は入社したが、) 新卒ハ入社しなかった。それなのに、社員研修には時間がかかった。

(17) a. 我が社には今年、[新卒ハ入社しなかった]けれども、社員研修には時間がかかった。

b. 我が社には今年、[中途ハ入社した]けれども、即戦力は増えなかった。

(18) a. 我が社には今年、[新卒ハ入社しなかった]が、社員研修には時間がかかった。

b. 我が社には今年、[中途ハ入社した]が、即戦力は増えなかった。

【B 類従属節】

(19) a. 我が社は今年、[新卒ハ入社しなかった]のに、社員研修には時間がかかった。

b.*? 我が社は今年、[中途ハ入社した]のに、即戦力は増えなかった。

(20) a. [新卒ハ入社しなく]ても、社員研修には時間がかかるものだ。

b.*? [中途ハ入社し]ても、なかなか即戦力は増えないものだ。

3.3. 一見例外に見える例

⇒ 一見、従属節に埋め込むことができているように見える場合も、実際は、対比のハが主節にかかる解釈となっている。

➤ 否定文に現れた対比のハは、問題なく従属節中で解釈できる。

(21) 太郎は、花子ハ野菜を食べるように、花子の皿に工夫をした。

a. * 太郎は、次郎については野菜を食べないように、工夫をした。

b. 太郎は、次郎については、野菜を食べるように工夫をしなかった。

(22) 太郎は、花子ハパーティに来たことを確認した。

a. * 太郎は、他の人についてはパーティに来なかったことを確認した。

b. 太郎は、他の人についてはパーティに来たことを確認しなかった。

(23) 太郎は 花子ハパーティに来なかったことを 確認した。

- a. 太郎は、他の人についてはパーティに来たことを 確認した。
- b. 太郎は、他の人についてはパーティに来なかったことを 確認しなかった。

- ↳ 否定文に現れる対比のハは、節を選ばず現れる。
- ↳ 対比のハが肯定文に現れる現象は、主節や「大きい」従属節という限られた環境でのみ見られる有標な現象である。

3.4. 区別すべき「対比のハ」

⇒ 「対比のハ+肯定」で注意すべきなのは、対比の働きが異なる場合。

- 「対比のハ」の下位分類 (加賀 1994): 「平行対比型」と「単純対比型」
 - ↳ 平行対比型の場合、文頭位置で個体ではない要素をとりたてることができない。この点で、主題のハと共通する性格を持っている。
 - ↳ 本研究の対象となるのは、述部の肯否が対立する「単純対比型」のみ

(24) 平行対比型: 「テレビ」と「ラジオ」について、それぞれ異なる述語を対比させる

太郎がテレビハ (自分で) 持っているが、ラジオハ (人から) 借りている (こと)。

(25) 単純対比型: 「テレビ」と「ラジオ」を対峙させ、それに肯定-否定の対立を対応させる

太郎がテレビハ持っているが、ラジオハ持っていない (こと) (加賀 1994: 226)

(26) * 5 個ハ、太郎がだんごを食べる (こと) (加賀 1994: 223)

(27) 森田がだんごを 5 個ハ食べる (が、6 個以上は食べない) (こと)

(加賀 1994: 223)

- 他にも、「少なくとも…ハ～だ」「私の知っている限りでは…だが他は知らない」という意味を表している場合の対比のハは、肯定極性表現である (Sawada 2013)。

(28) 太郎は、[少なくとも花子ハ野菜を食べる]ように、見張っていた。

(他の人についてはどうしたか、知らない。)

- ↳ 上記で扱ったハと異なり、「小さな」従属節にも問題なく現れている。
- ↳ 否定極性が問題となっているのは、「単純対比型」の「対比のハ」のみ。

4. 「対比のハ+否定述語」と否定極性表現シカ

4.1. 否定極性表現シカの振る舞い

-1つの否定辞につき、1つしか現れない

(29) * 太郎シカ りんごシカ 食べなかった。 (Kato 1985: 155)

-シカと否定辞が共起しているとき、否定辞は他のNPIを認可できない

(30) * 一人モ りんごシカ 食べなかった。 (Kato 1985: 155)

-否定辞の省略を許さない(cf. 朴 2007)

(31) * パーティには、太郎シカ来なかったの? 本当に、太郎シカ来なかったの?

4.2. 対比のハの振る舞い

⇒ 対比のハは、「全員」などに後接すると、必ず述語が否定となり、区別すべき「対比のハ＋肯定」の解釈を避けることができる(加賀 1997、茂木 2004 他)。ここでは、「全員ハ＋否定」の例を含めて、シカと並行的に振る舞うことを見る。

-1つの否定辞に1つのハしか現れられない

- (32) *全員ハ 数学ハ できない。
(33) *全員ハ 全部ハ 話さなかった。
(34) 誰も 一言モ 話さなかった。

-ハと否定辞が共起しているとき、否定辞は NPI を認可できない

- (36) *全員ハ 少しモ 勉強をしなかった。
(35) *全員ハ 数学シカ 勉強しなかった。
(37) 一人モ 何モ 食べなかった。

-否定辞を省略できない

- (38) *説明会には、{全員ハ／太郎ハ} 来なかったんですか？
本当に {全員ハ／太郎ハ} 来なかったんですか？
(39) 説明会には、{学生が1人モ／太郎モ} 来なかったんですか？
本当に {一人モ／太郎モ} 来なかったんですか？

➤ 「全員ハ＋否定」の振る舞いは、否定極性表現シカのふるまいと一致する。

↳ 対比のハがシカと同様の否定極性としての特徴を持つと考えることで、この現象は自然に捉えることができる。

5. まとめと展望

(40) 本発表の主張（再掲）

- a. 従来「対比のハ」と呼ばれてきたもののなかには、否定極性を仮定すべきものがある。
b. 肯定文に現れた対比のハは、(40a)の対比のハとは意味が異なる。もしくは、主節でのみ例外的に現れている例である。

⇒ 対比のハが肯定述部と共起する現象を「大きい」節でのみ起こる例外的な現象として切り離すことで、対比のハと累加のモの関係を、複雑な装置を仮定することなく、ごく単純な対立によって捉えることができるようになる。

(41) 累加のモ：肯定極性表現、肯定述部と呼応する

対比のハ：否定極性表現、否定述部と呼応する

↳ これらの対立は、先行研究においても指摘がある。しかし、対比のハが肯定述部とも共起するというデータを、否定述部共起した場合と同等に扱うことで、シカに仮

定されているような「否定極性表現と否定辞の呼応」という素朴な関係を基本にした否定極性のメカニズムを用いることができなかった。その結果、否定とスコープのインタラクションが起きない事実や、ハとモノの極性の対称性が見えにくくなっていった。

-課題

- ⇒ なぜ、「大きい」節では、対比のハは肯定述部と共起することが可能なのか？
- ⇒ スケールを持つ肯定極性表現のハ(Sawada 2013)と、本発表で扱った対比のハの関係。
- ⇒ 類型論的な発展可能性
 - 野田(2015)：スペイン語では「類似」のモはとりたて表現で表されるが、「反類似」のハは専用のとりたて表現を持たなかったり、あったとしても実際にはあまり使われない表現を用いる。
 - ↳ とりたて詞の極性タイプからのアプローチが可能か？

参考文献

- 奥津敬一郎(1974)『生成日本文法論』大修館。
- 加賀信広(1994)「対比の「は」とペグ」『言語文化論集』38, pp.223-232, 筑波大学現代語・現代文化系。
- 加賀信広(1997)「数量詞と部分否定」中右実(編)『日英比較選書4 指示と照応と否定』pp. 92-178, 研究社。
- 小林亜希子(2009)「とりたて詞の極性とフォーカス解釈」『言語研究』136, pp. 121-151, 日本言語学会。
- 沼田善子(1986)「第2章 とりたて詞」奥津敬一郎・沼田善子・杉本武(共著)『いわゆる日本語助詞の研究』pp.105-255, 凡人社。
- 沼田善子(2000)「「塩も入れないと、美味しくならない」－とりたて詞と否定」『月刊言語』29(10), 大修館書店。
- 野田尚史(2015)「日本語とスペイン語のとりたて表現の意味体系」『日本語文法』15(2), pp.82-98, 日本語文法学会。
- 朴江訓(2007)「「しか…ない」の「多重NPI」現象について」『日本語文法』7(2), pp. 154-170, 日本語文法学会。
- 南不二男(1974)『現代日本語の構造』大修館書店。
- 茂木俊伸(2004)「とりたて詞文の解釈と構造」筑波大学博士論文。
- Kato, Yasuhiko (1985) *Negative Sentences in Japanese*, Sophia Linguistica Monograph 19, Sophia University.
- Sawada, Osamu (2013) *The Japanese contrastive wa: a mirror image of EVEN*. Thera Crane, Oana David, Donna Fenton, Hannah J. Haynie, Shira Katseff, Russell Lee-Goldman, Ruth Rouvier, and Dominic Yu (eds.) *Proceedings of the 33rd Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*. pp.374-387. Berkeley, CA: Berkeley Linguistics Society.